

## 第一次世界大戦前ベルリンのシオニストの多様性 —エリアス・アウエルバッハの事例研究を通して—

河合 竜太

同志社大学大学院文学研究科博士後期課程

### 要旨

第一次世界大戦前のドイツのシオニズムを理解するために使用されてきた概念に「ジレンマ」がある。ドイツのシオニストが直面したドイツかシオニズムか、ドイツ国家かユダヤ人国家かとの間の板挟みは彼らの積極的行動を制約したと研究者は想定してきた。本稿は個人を対象とする事例研究を通じて、上記の「ジレンマ」に関する想定を検証することを目的としている。医師で歴史家であったエリアス・アウエルバッハ(1881-1971)は大戦前ベルリンのシオニズムにおける重要な人物で、パレスチナ移住の先駆者として知られている。本稿は、ポーゼン州の幼少時代からベルリンでのシオニストへの転向、パレスチナ移住までの彼のシオニスト活動の軌跡を、行動と動機に焦点を当てて分析する。この事例は、ジレンマが彼のシオニスト活動を制約したのではなく、むしろその動機を形成したことを明らかにし、ドイツのシオニストの多様性についての新たな説明枠組みを示唆するものである。

### キーワード

ドイツ・シオニズム、反ユダヤ主義、正統派、パレスチナ、ジレンマ

## **Zionist Diversity in Berlin before World War I: A Case Study of Elias Auerbach**

Ryuta Kawai  
Doctoral Student  
Graduate School of Letters, Doshisha University

### **Abstract:**

Before the First World War, German Zionism was perceived as a dilemma. According to historians, German Zionists had a limited and difficult choice between Germany and Zionism—a German state or a Jewish state. A key question is whether such a dilemma resulted in indifference to Zionist activism. This article explains German Zionism as a dilemma through a case study of the historian and physician Elias Auerbach (1881–1971), who was an important figure in Zionist circles in Berlin before the war and known as a pioneer emigrant to Eretz Israel. The study analyses his Zionist activities from childhood in the Province of Posen to adherence to Zionism in Berlin until making Aliyah, while focusing on his activities and the motivations for his actions. This case study shows that the dilemma did not cause general indifference but did motivate Auerbach’s Zionist activism, thus suggesting a new explanation for Zionist diversity in Germany.

### **Keywords:**

Zionism in Germany, Antisemitism, Orthodox Judaism, Palestine, Dilemma

## 1. はじめに

第一次世界大戦前のドイツのシオニズムを理解するにあたって使用されてきた概念に「ジレンマ」がある。この概念は、2つの互いに正反対な事柄の板挟みになることを意味しているが、近代のドイツ・ユダヤ人一般を理解するときの鍵とされてきたし、ドイツのシオニズムを理解するためにも有効であるとされている。そこでの「ジレンマ」とはドイツかシオニズムか、ドイツ国家かユダヤ人国家かという二者択一であり、両者の板挟みにあった窮地を意味している。ドイツとユダヤという二重の忠誠がこの時期のシオニストを悩ました葛藤であった。

「ジレンマ」という概念を使用することでドイツのシオニズムを理解することを提唱し、その後の研究に影響を与え続けることになったのがイエフダ・ラインハルトによる1975年の著作『父祖の地あるいは約束の地——ドイツ・ユダヤ人のジレンマ 1893-1914——』である<sup>1</sup>。この概念が好まれる理由は、それが第一次世界大戦前のドイツにおいてシオニズムがなぜ消極的であったか、さらにはなぜそれが消極的性格を脱出しラディカルな性格を帯びるようになったか、を上手く説明すると考えられてきたからである。前者に関しては、ドイツへの愛着がシオニズムの理念と対立し、結果としてシオニストの行動を制約したと説明される。後者に関しては、大戦直前にドイツのシオニズムに生じた穏健なタイプから過激なタイプへの「ラディカル化」は「ジレンマ」が緩んだ結果と理解される。具体的には1890年代の過激な反ユダヤ主義がドイツに対する失望を生み、ドイツ文化への愛着を薄れさせ、シオニズムへと舵を切る方向にシフトさせたという説明である。この説明は同化と解放、市民的平等の実現への希望を抱く「第一世代」から過激な反ユダヤ主義に直面しドイツに失望した「第二世代」への世代交代の論と関連している<sup>2</sup>。

しかしラインハルトの主張は主に以下の問題を抱えている。まずドイツのシオニズムをドイツ・シオニスト連合に代表させていることである。ドイツ国内のシオニズムは、世界シオニスト機構のドイツ代表組織であったこの団体によって牽引されたが、必ずしもこの団体の活動に還元されるわけではなかった。近年の研究者が解明しているように、この団体の外側にシオニスト系の諸団体が広がっていた<sup>3</sup>。また彼の主張は「ジレンマ」が行動を制約するという前提に立ってきた。板挟みや葛藤が積極的行動を抑制したという考えである。その指標としてしばしば挙げられるのがドイツからパレスチナへの移住者数の少なさである。しかし「ジレンマ」は本当に行動を制約するのであろうか。

本稿は第一次世界大戦前のドイツのシオニズムに関するこうした問いに対して、一人の人物に焦点を当てることで答えることを試みる。本稿が取り上げるのはエリアス・アウエルバッハである。彼はシオニズムの中心地の一つベルリンを代表

する人物であった。彼の活動の主な舞台はドイツ・シオニスト連合の組織活動の外部にあったため、ラインハルト説を再検討する素材としてふさわしい。この人物は早期にパレスチナ移住をしたことで知られている。1909年の移住は、同時代人の証言によれば、ドイツのシオニズムで最初の事例であった。その積極的行動はドイツ・シオニスト連合のラディカル化に先行していた。こうした行動の特異性の原因は、この人物がブルジョワ層の同化派家庭出身であったドイツのシオニストの大半と異なり、正統派ラビを父に持つ伝統的なユダヤ教の家庭に生まれたことにあったのだろうか。つまりドイツかシオニズムかという「ジレンマ」が存在しなかったためだろうか。本稿はこの人物を取り上げることで、「ジレンマ」に関する従来の前提を再考し、それを通じてドイツのシオニズムの多様性を浮かび上がらせることを課題としている。

本稿は以下の構成をとる。まず正統派からシオニストに至るアウエルバッハの転向過程を明らかにする。次に自伝の分析を通じて焦点が当てられるのは、彼の内面にある転向の動機である。ここで扱う対象の時期は、シオニストへの転向が確認されるアウエルバッハのベルリン時代を中心とした1880年代から1920年頃までである。本研究にとって最も重要な史料はアウエルバッハが執筆した自伝であるが、それを補完するものとして同時代の新聞や雑誌の記事及びハイデルベルクのドイツ・ユダヤ中央文書館所蔵の個人資料がある<sup>4</sup>。

## 2. シオニストへの転向

1882年6月28日エリアス・アウエルバッハは、ポーゼン州の小村リッチェンヴァルデ（現ポーランド領リチヴウ）の正統派ラビの家に8人兄弟の第8子として生まれた<sup>5</sup>。彼の幼少期の環境はポーゼン州内の小村で、閉鎖的なユダヤ社会だった。彼は自伝のなかで、幼少期の日常生活が宗教的敬虔さと伝統によって特色づけられていたことを回想している。幼少時代のアウエルバッハにとって父の存在が大きかったようである。父はラビとしてユダヤ社会の中心にいただけでなく、彼にとっては教育者でもあった。アウエルバッハはヘブライ語やユダヤ教の伝統文献を父から学んだ。父は息子エリアスが抜群の才能を示したことを記している<sup>6</sup>。父や彼自身が振り返るように、幼少期のアウエルバッハは宗教的伝統の影響の強い正統派のユダヤ人であった。このことは彼をして、ブルジョワ層出身であった同時代のドイツのシオニストの多くから一線を画すものである。

シオニズムの影響は彼の幼少時代には確認できない。その影響は、1892年父の決断によってベルリンのギムナジウムに進学して以降である。では正統派の子どもとして育ったアウエルバッハのシオニストへの転向は、ベルリンでどのように

生じたのだろうか。

自伝で著者が認めているように、シオニストへの関心の始まりにはハインリヒ・レーヴェと兄イスラエル・アウエルバッハによる影響があった<sup>7</sup>。1895年春13歳の時、兄イスラエルの紹介を通じて当時26歳だったレーヴェと出会う<sup>8</sup>。レーヴェは多数のシオニスト団体の活動に関わったベルリンのシオニズムの中心的人物であった。ただしアウエルバッハの場合、彼からの影響は組織的な宣伝活動ではなく、むしろ個人的な師弟関係を通じたものだった。レーヴェが彼に関心を抱いた理由は定かではないが、自伝で述べられるように、彼の聖書とヘブライ語に関する広範な知識がブルジョワ層の同化派家庭出身であったレーヴェに感銘を与えた可能性が高い<sup>9</sup>。そして同年、「公式にシオニストになる」と呼ぶべき象徴的出来事があった。彼はその出来事を次のように記している。

レーヴェが扉を開いた。その一室には「ドイツのシオニスト達」が集結していた。およそ25名から30名である。不意にレーヴェは私を抱え上げ、机の一つに立たせて告げた。「皆さん。我らの最も若いシオニストを紹介しよう。エリアス・アウエルバッハである」<sup>10</sup>。

自伝によればこの集会の出席者には、ベルリンのシオニストであるヴィリー・バンブスやヒルシュ・ヒルデスハイマー、テオドール・ツロツイスティらをはじめ、後にドイツ・シオニスト連合の指導部となるマックス・ボーデンハイマーやデイヴィッド・ヴォルフゾン、「シオニズム」という語を創始したナタン・ビルンバウム、イスラエル初代大統領となるハイム・ヴァイツマンがいた。重要なことはこれらの人物が世界のシオニズム運動を率いるドイツ語圏の著名なシオニストだったことだけではなく、むしろドイツのシオニズム運動の「第一世代」（主として1870年代以前の生まれ）に属する人々であったことである。アウエルバッハのシオニストへの転向は、リヒャルト・リヒトハイムやクルト・ブルーメンフェルトら同世代の人々よりも早い時期にあった。「私はシオニストとしての精神的発達という意味で、実際に属する世代よりもかなり先行していた」<sup>11</sup>。大学進学後の経験は彼が「第二世代」に属していたことを示しているが、ここでみた原初的な経験が彼を典型的な「第二世代」から区別させることになる。

とはいえこの出来事をもって彼のシオニストへの転向が完了したと断定することはできない。この時期のシオニズムへの関わりの前提にあるのが故郷に残る親に代わり彼を支えた兄イスラエルの存在である。彼にとってイスラエルはシオニストの師であるのみでなく日常生活を支える保護者であった。兄の影響力の大きさは1905年ベルリン大学に提出された弟エリアスの博士論文の献辞「若き日の

指導者、兄イスラエルへ」という記述が示している<sup>12</sup>。文化シオニズムの影響が強かったベルリンでイスラエルはその主要な活動家の一人として知られ、マルティン・ブーバーとも親交が深かった<sup>13</sup>。他方で後年アウエルバッハは自身の活動を文化シオニズムから距離を置いたものと表明する<sup>14</sup>。こうした兄から独立したシオニストとしての立場の確立は、次に見るように大学入学以降であると考えられる。そもそも彼自身が認めるように、この時期のシオニズムへの関心はより広範な学問的・知的関心の一つという意味を超えるものではなかった<sup>15</sup>。

1900年の大学入学後アウエルバッハのシオニスト活動は本格化する。同時代のシオニストの間で彼は弁論家として知られるようになる。マックス・ユングマンは彼を「私たちの間で最も才能豊かで、深く心を揺さぶる演説者の一人」であったと回想する<sup>16</sup>。彼の活動を示す例としてカトヴィッツとエッセンの例がある。カトヴィッツは1884年11月のホヴェヴェイ・ツィオンの大会開催地で、ドイツ国内初のシオニスト系の団体の設立地であったが、その後シオニスト活動の発展は遅れていた。ようやく1904年ドイツ・シオニスト連合カトヴィッツ支部が設立されているが、その際に「ユダヤ人の民族政治」と題した講演を行ったのがアウエルバッハであった。エッセンではシオニストと反シオニストが争っていた。アウエルバッハはアドルフ・フリーデマンとともに、反シオニスト陣営が開催した集会で現地のラビとの論争のためにベルリンから招集されている。約2か月後、シオニスト側の集会で彼の講演が行われ、エッセン支部の設立に至っている<sup>17</sup>。

アウエルバッハがシオニスト会議を初めて訪問したのは1903年にバーゼルで開催された第6回大会で、ドイツ・シオニスト連合の機関紙『ユダヤ展望』のジャーナリストとしての出席であった。1901年に同紙の編集担当であったレーヴェとエリアスの姉ヨハンナが結婚した後、彼は同紙の編集への関与を深め、匿名を含めて多数の記事を執筆する<sup>18</sup>。また、この大会でヘルツルと面識を得ていた。ヘルツル派のレーヴェとの関係が示しているように、ヘルツルの存在は彼にとって小さくはなかったが、政治・外交方針には疑問を抱いていた。この大会で紛糾した東アフリカ入植案（ウガンダ案）には反ヘルツル派を代表したロシア・シオニスト指導者メナヘム・ウスィスキンらと協力して反対活動を行っている<sup>19</sup>。その後、1905年と1907年のシオニスト会議に参加し、ヘルツル亡き後のシオニズム運動の変化を現地で目撃し、若きウラディミル・ジャボティンスキーの才能には強い衝撃を受けたようである。ただし世界のシオニズム運動の中でのアウエルバッハの役割を過大評価することはできない。ブーバーやマックス・ノルダウとの親交、実践シオニズムの指導的人物であるオットー・ヴァールブルクやフランツ・オッペンハイマーらとの協力活動が確認できるが、シオニスト会議での彼個人の役割は、あくまで『ユダヤ展望』の記者としての性格が強かった。

アウエルバッハのシオニスト活動の主要な場はベルリンであり、しかもドイツ・シオニスト連合やベルリン・シオニスト協会といった正統的な団体ではなく、その外部に広がったサブカルチャーにあった。彼はシオニスト系学生組合の創設への関与、および青年層の育成に尽力している。彼はテオドア・モムゼンの弟子で古代史家となるオイゲン・トイブラーと親交が深く、1900年には共同で学術シオニスト団体を設立する。また1902年にはベルリンで最もラディカルなシオニスト団体として知られるようになる学生組合ハスモネアをエゴン・ローゼンベルクらと設立している<sup>20</sup>。ドイツ国内のシオニスト系学生組合の統一を目的として1914年に創設されたユダヤ人学生組合連合でアウエルバッハは幹部を務めた<sup>21</sup>。この団体はリヒトハイムやブルーメンフェルトらその後のドイツ・シオニスト連合の指導者層を輩出し、「シオニズムの大学」と呼ばれた。ほかに特筆すべきことに体操運動への参加がある。ノルダウの「筋骨たくましいユダヤ人」の概念はアウエルバッハの考えに影響を与えていた。バル・コホバ・ベルリン体操協会には、ギムナジウム時代から参加し、兄イスラエルとともに協会指導部を務めている。彼の体操活動はパレスチナ移住後にも継続され、パレスチナでの体操・スポーツ活動の展開に貢献した<sup>22</sup>。

以上のように大学時代のシオニスト活動は、ギムナジウム時代からの変化を示している。シオニスト活動は、知的関心から実践的あるいは戦闘的タイプに変化している。この変化はベルリンで影響力をもった文化シオニズムへの批判と関連していた。彼は文化シオニズムに「現実離れした理論や飾り付けられた言葉で心が満たされる恐れ」を見ていた<sup>23</sup>。むしろ彼が求めたのは、知的精神的な活動だけに献身することではなく、むしろ現実的な変革を追求する姿勢である。

こうした姿勢の変化に影響を与えたのが、大学での反ユダヤ主義であった。ドイツ・シオニストのラディカル化は、1890年代のギムナジウムや大学での過激な反ユダヤ主義に起因するものであった。生物学や人種主義に基づく反ユダヤ主義である。ギムナジウムには「壁なきゲッター」はあったが反ユダヤ主義は存在しなかったと回想するアウエルバッハにとっても、大学の反ユダヤ主義は衝撃が強く、彼のシオニスト的確信を決定づける要因となった<sup>24</sup>。彼自身に影響を及ぼした反ユダヤ主義は、ベルリン大学の学術読書室を舞台とするものであった。読書室は学生主体で運営され、その運営委員の選出をめぐる反ユダヤ主義系の学生とそれに反発する学生の闘争の場となっていた。シオニスト系の学生組合の指導部を務めたアウエルバッハもその闘争に参加する<sup>25</sup>。そこで彼が経験した反ユダヤ主義はドイツ学生協会ベルリン支部のそれであった。同協会の反ユダヤ主義はトライチュケやゲオルク・フォン・シェーネラーから影響を受けた最も過激な性格のものとして知られていた<sup>26</sup>。その経験は彼に深い衝撃を与え、自伝によれば、

この経験がパレスチナへの移住を決定づけることになった<sup>27</sup>。

時系列的にはやや遡るが、故郷を離れベルリンのギムナジウムに進学した後に生じた宗教的伝統に対するアウエルバッハの態度の変化を確認しておきたい。正統派ラビの父の意向により、彼はギムナジウムでの学びと並行して、ベルリンのアダス・イスロエルが運営する正統派の宗教学校で学んでいる。宗教教育からの離反に危機感を抱いたエズリエル・ヒルデスハイマーが1869年に初等・中等学校の生徒向けに設立した学校であった<sup>28</sup>。1894年の夏には故郷でバル・ミツヴァを行い、その様子をアウエルバッハの父が詳細に記述している<sup>29</sup>。しかし段階的ではあるが着実に進んでいたのは、宗教的伝統からの離反である。そのきっかけの一つが読書経験であった。この時期のアウエルバッハに影響を与えた書物はダーウィンやヘッケルによる自然科学の文献、両者から影響を受けたヴィルヘルム・ベルシエの大衆向け啓蒙書、モーゼス・ヘスの『ローマとイエルサレム』およびそれを通じて知ったスピノザの著作であった。敬虔な家庭で育ち、宗教的伝統教育を受けていたにも関わらず、彼にとってこれらの著作は拒否されるべき対象ではなく、むしろ聖書を批判的に読む手がかりとなった<sup>30</sup>。「次に、正統派の宗教学校の教師が用意している平凡な回答に私は満足できなくなった。多少とも丹念に天文学の文献やダーウィンを読んだあとには、世界の創造の方法についての創世記第1章を気楽に読むことはできなくなった」<sup>31</sup>。

ベルリン大学進学後の医学の学び、さらには人種科学への関心の深化が、彼を正統派の宗教的世界観から合理主義と近代科学のそれへの転換を進めることになった。人種科学者としてのアウエルバッハの名前を有名にしたのは、1907年『人種・生物学論叢』に掲載された論文「ユダヤ人の人種問題」であった<sup>32</sup>。この論文は、フェリクス・フォン・ルーシャン、フリッツ・レンツら同時代の著名な人種科学者による注目を集め、経済学者ヴェルナー・ゾンバルトのユダヤ人論にも影響を与えている。人種問題への彼の関心は、人種としてのユダヤ人の純粋さの問題にあった。彼の主張は、ユダヤ人種が歴史的に異民族と混交を経験せず、純粋性を維持しているというもので、つまり聖書の時代から19世紀末まで人種・生物学的連続性を保存していることにある。その主張は、ベルリン大学医学部に提出された彼の博士論文の主要テーゼと関連していた。

人種論はアウエルバッハのシオニズム観に多大な影響を及ぼしていた。彼にとって取り組むべき課題は、民族あるいは人種としてのユダヤ人の消滅の問題であった。1911年の著作『ドイツ・ユダヤ人の没落』で知られるフェリクス・タイルハーバーや社会学者アルトゥール・ルッピンら同時代のベルリンのシオニストがユダヤ人の人口問題を取り上げていたが、アウエルバッハもその一人であった<sup>33</sup>。問題とされたのが近代の同化と解放である。同化と解放後の異宗派間結婚、出生



率の低下、改宗の増大等によるユダヤ人人口の減少はシオニズムで取り上げられるテーマであった。彼はすでに1902年の時点でダーウィニズムの用語を用いて、シオニズムをユダヤ人の消滅を阻止する「生存をめぐる闘争 Kampf ums Dasein」と言及していた<sup>34</sup>。これは、彼のシオニズムが宗教的動機に基づくのではなく、科学的世界観によって支えられていたことを示している。この考えは、1912年に世界シオニスト機構の依頼で刊行されたパレスチナの宣伝パンフレット『ユダヤ人の土地としてのパレスチナ』に影響を及ぼしている<sup>35</sup>。

最後にパレスチナ移住の前後の動向を簡潔に示しておきたい。アウエルバッハのパレスチナへの移住の早さはドイツのシオニストとしては異例であった。組織的活動ではなく個人的動機に基づく移住としては最初の例と言われている。1904年医師国家試験の合格後、アウエルバッハはベルリンで開業医を営み、1907年ハーグでのシオニスト会議でラヘルと婚約している。パレスチナ移住を決断した時期は定かではないが、1909年3月に彼はパレスチナへの視察旅行を行っている。移住を実行した日は同年8月15日であった。彼は故郷のシナゴークでラヘルと結婚し、その晩ハイファに出発した。移住後の主な活動には、近代医学に基づく病院の建設とハイファのゲマインデの建設がある。1911年6月1日に開設された病院はハイファ初の近代的病院であった。その開設にあたり、パリのエドモン・ド・ロチルド男爵夫人とパレスチナ文化活動ユダヤ女性連盟からそれぞれ年1000フランの資金援助があった<sup>36</sup>。ゲマインデに関して言えば、その運営と工科大学の創設への関与、マッカビ・ハイファの設立が挙げられる。こうした貢献から、晩年ハイファの名誉市民の称号を授与されている。第一次世界大戦の勃発時にはパレスチナからドイツ軍へ志願した。

本章ではアウエルバッハのシオニストへの転向過程を伝記的事実からたどった。ここから明らかとなることは、その転向が一度に実行されたわけではなく、段階的であったことである。その転向はあらかじめ方向が定まっていたわけではない。またドイツのシオニズムを代表する宣教師へと成長したアウエルバッハであったが、同世代の同志であったブルーメンフェルトやリヒトハイムのようなドイツ・シオニスト連合の幹部であったわけではない。彼はシオニズムの特定の党派を代表するような人物でもなかった。むしろ彼はベルリンで発展したサブカルチャーを基盤とした活動家で、一つのグループが支配的とならなかったベルリン・シオニズムの多方向性を体現していた<sup>37</sup>。

彼のシオニスト活動はどのような動機に基づいていたのであろうか。正統派の出自を持つも宗教的動機はほとんど重要な役割を果たしていない。また彼自身が属すると考えた第一世代のシオニストとは異なって、困窮する東欧のユダヤ人の救援という慈善的動機は彼自身によって否定されている<sup>38</sup>。反ユダヤ主義はパレ

スチナへの移住を決断する要因となったが、彼のシオニストへの転向のきっかけとなったわけではなかった。では、彼のシオニスト活動を一貫して支えていた動機とは何であったのだろうか。次章では自伝の分析を通じて、彼のシオニストへの転向の動機に対して内面から接近することによって、彼の行動のラディカル化がドイツとシオニズムの間の「ジレンマ」に基づいていたこと、つまりその解消ではなかったことを確認したい。

### 3. 内面的変化

正統派からシオニストへ転向し、しかも異例の早さでパレスチナ移住を決断、実行するに至った彼の内面はどのような変化をたどったのだろうか。以下ではその変化を恥の経験と名誉と誇り、反ユダヤ主義による名誉の否定、父との対決という三つの観点から説明したい。そして最後に、ドイツへの忠誠とシオニズムの間の「ジレンマ」の問題を取り上げる。

まず注目したいのがユダヤ人であるがゆえの恥の経験である。幼少期に閉鎖的なユダヤ社会で育ったアウエルバッハがベルリンのギムナジウム入学直後に経験したのが、恥の経験であった。恥や羞恥は、現実のあるいは想像上の他者の注視のもとで経験される。一種特別の注視が向けられたときに生じる、自己と他者の間にある視線の構造の産物である<sup>39</sup>。ギムナジウムは、解放後も非ユダヤ人とユダヤ人の接触が限られていたなかで、そうした視線の構造を生み出す場であった。自伝が回顧することは田舎訛りの発音が嘲笑されたことである。そしてもう一つが体操であった。これはギムナジウムに通学するユダヤ人にとって羞恥に関わる共通の経験であったようである。体操の時間には他の学生から注視が向けられた。しかもその視線はユダヤ人に関する偏見やステレオタイプの影響を受けていた<sup>40</sup>。ギムナジウムで初めて体操を知ったアウエルバッハは特に苦手を感じたようである。嘲笑の対象になっただけでなく、成績も最も低い評点であったため、彼はその経験を「ひどいショック *sehr schmerzlich*」だったと回想している<sup>41</sup>。こうした経験は、彼自身によれば反ユダヤ主義ではなかったが、羞恥の感情を生み、同じ男子の生徒でありながら、ユダヤ人であるがゆえにその平等の一員ではないという感覚、劣等感を抱かせることになった。1899年生まれの教育学者でイフード党の創設に参加するエルンスト・ジーモンはギムナジウム時代の体操を同様の苦い経験として振り返っている。それだけに苦手とする体操の克服は、いっそう特別な記憶となっていた。「体操の授業で初めて跳馬を「体得」した時、たとえまだシオニストとしてではなくとも、名誉あるユダヤ人になったことを実感した」<sup>42</sup>。ユダヤ人であるがゆえの恥の経験は、その内容は異なっているが、フロイトやヘル

ツル、ピンスカーにも共通していた<sup>43</sup>。

恥と羞恥の経験が、そのままドイツへの失望を生んだわけではなかった。むしろアウエルバッハを含め、ドイツのシオニストが挑戦したことはユダヤ人であるがゆえの名誉と誇りの発見であった。1899年ギムナジウム時代に課された「名誉」をテーマとした小論文で、アウエルバッハは「ユダヤ民族の名誉 *die jüdische nationale Ehre*」について書いている<sup>44</sup>。自伝は、彼が歴史に関心を抱いたきっかけの一つが、ユダヤ人の歴史を英雄の物語として再解釈する叙述にあったことを伝えている。ギムナジウム時代から確認できるユダヤ人の名誉への関心は、大学時代にユダヤ人の学生組合と体操団体バル・コホバ・ベルリンへの参加によって、さらに深められることになった。それらの団体の主たる目的がユダヤ人の名誉の回復であった<sup>45</sup>。つまりユダヤ人を臆病で、名誉のない存在としてスティグマ化した反ユダヤ主義的な言辭への抵抗である。したがってそれらの団体では、スティグマを打ち破るために、決闘、体操、スポーツといった身体鍛錬が重要な位置を占めた。アウエルバッハのシオニズム観は名誉と誇りという価値観と深く関連していたが、その背景にはこれらの団体の影響が挙げられる。

1905年に一年志願兵としてミュンヘンで軍務に服したときに非ユダヤ人の上官が示したシオニストとしてのアウエルバッハへの称賛を記述する筆致は、著者の誇りを感じさせる。逆に同じ上官が非シオニストのユダヤ人を「いくじなし *Schlappschwanz*」と嘲笑したことに、著者は不快感を示していない<sup>46</sup>。民族の名誉と誇りを重視するシオニストは、同化派を反ユダヤ主義に抵抗しない、臆病で、女々しく、意志の弱い人々と非難していた。自伝はアウエルバッハがこうした認識を身に付けていたことを示唆している。恥と羞恥の経験は、多くのシオニストと同様にアウエルバッハの内面に影響を及ぼしていた。しかしそれはドイツへの失望を生んだわけではない。恥と羞恥の経験を契機として彼が確立したシオニスト的自己は、名誉と誇りという価値観に基づいた。その価値観は、ヴィルヘルム期ドイツの教養エリートの名誉観に同意し、それを称揚するものであっても、逆にそれを拒否するものではなかった<sup>47</sup>。

第2点目は、アウエルバッハにパレスチナ移住を決心させた要因として挙げられる反ユダヤ主義によるユダヤ人の名誉の否定である。ただし注意しておきたいことは、彼が反ユダヤ主義者を全面的に拒否していたわけではないことである。それを伝えるのがギムナジウム時代のある教師とのエピソードである<sup>48</sup>。教師ジロウは厳格な保守派のドイツナショナリストで、反ユダヤ主義者とされた人物であった。授業でドイツ民族の高貴さという信念と、ユダヤ人をドイツの「内なる他者」とみなす意見を表明していたという。しかし自伝を執筆する著者はその人物を、反ユダヤ主義者と認めているにもかかわらず、拒絶していない。この教師

を拒絶しない態度は、自伝の執筆段階だけでなく、すでにそれ以前にさかのぼるようである。ギムナジウム卒業後のジロウ教師との話がある。1915年休暇で戦場を離れたアウエルバッハはこの教師を訪問したという。自伝が伝えることは、大戦にドイツ兵として従軍し、ドイツ国家に忠誠を尽くすアウエルバッハに対してこの教師が向けた称賛であり、その称賛への著者の誇りである。自伝を記述するアウエルバッハにとって重要であったことは、反ユダヤ主義者とされた人物でさえ、シオニストとしての自己の名誉と誇りを承認したことであった。

ベルリン大学の読書室の自治をめぐる反ユダヤ主義者との対決が彼にとって決定的であったことは前章で確認した。その出来事の重要性は、名誉と尊厳、誇りという観点から理解されるべきである。現実主義者であったアウエルバッハにとって、名誉や誇りとは抽象的で観念的なものではない。彼が重視したのは、現実ユダヤ人が非ユダヤ人と同等の権利を認められているかという問題であった。こうした考えを持つ彼にとって、大学内の自治組織からのユダヤ人の排除は、ユダヤ人としての名誉と誇りの否定と感じられたと考えられる。ヴィルヘルム帝政期の反ユダヤ主義は、ユダヤ人を生物学・人種的に劣等な集団とみなした。そうした考えに基づくユダヤ人の排除は、ユダヤ人の名誉の絶対的な否定、非ユダヤ人とユダヤ人の間の相互の承認の不可能性であった。ユダヤ人解放は法・政治的にユダヤ人の市民的平等を承認した。しかし日常的現実において、アウエルバッハが直面したのは、解放後に顕在化したユダヤ人の名誉と誇りの否定であった。

繰り返しになるが、この事件以後、またパレスチナへの移住後もドイツへの忠誠がこの人物にとって重要であったことに変わりはない。誇りをもって伝えられるのは、第一次世界大戦への従軍であり、前線で示した活躍とそれに対する鉄十字勲章の授与である<sup>49</sup>。他方で名誉と誇りを追求する態度が、彼にとって暴力的な行為を容認しうるものへと転化しえたことも見逃すことはできない。例えば、ユダヤ人の名誉と誇りを守るために、一時はパレスチナにおいてアラブ人との戦闘的行為を辞すべきではないという強硬な姿勢を示していた<sup>50</sup>。その背景には、名誉と尊厳を守るためであれば、暴力や危険な行動でさえ英雄的行為として称賛されるべきであるという考えがある。

三つ目の観点は父との対決である。すでに見てきたように、自伝が示すのは、著者にとって行為を評価し判断する基準としての名誉と誇りの重要性である。名誉と誇りを守る行為は英雄的行為として称賛されることになる。この価値基準を考慮すれば、自伝がある大きな断絶を内包していることに気付くことになる。それは自伝全体を統制する断絶である。その断絶は、「英雄的行為 *Heldentum*」をめぐる父との対決を象徴する出来事である。その出来事は本来的にはシオニズムと無関係でありながら、自伝の回顧的叙述の中では以下に示すように、シオニスト

への転向の前兆として記述されることになる。父が執筆した息子エリアスの回想録はそれを記していないが、自伝の著者にとってそれは「大事件」と言及されるほど、忘れられない経験であった<sup>51</sup>。

1892年アウエルバッハが10歳の時のことである。故郷の村を流れる川に架かる橋の工事があり、しばらくの間、木製の仮橋が設置された状態で放置されていた。橋の状態の詳細は不明であるが、後に彼の父が命の危険を心配したことから、おそらく橋桁のない危険な状態だったと想定される。彼は友人数名とその仮橋を渡る遊びを行った。その場に居合わせた友人の一部はその遊びに参加しなかった。著者は彼らを「英雄的行為に価値を見出さなかった」と振り返る。彼が示したのは、橋から落下する恐怖に負けない勇敢さと大胆さであったという。翌日その話を聞いた父はその行為を罰するために息子をむちで打った。

この事件はシオニズムとは関連のない幼少期のエピソードの一つにすぎない。すでにみたように、アウエルバッハがシオニズムに接近するのはベルリン移住後である。しかし次の記述は、この事件が自伝の中で与えられている特別な位置を示している。

幼少時代の私は、父が正しく、当然与えられるべき罰を私は受けたにすぎないと納得していた。だが今となっては、客観的にみて、そう確信していない。その事件以来、私は木登りや体操、水泳、殴り合い、兵役、そしてとりわけ戦争で幾度となく身を危険にさらしてきたが、80歳を超えても健在である。もし私がめめしい男 Memme として行動していたならば、今生きているであろうか。かつて私を大変感銘させたものとして、フランツ・オッペンハイマーと交わした会話での次の発言がある。「私の息子たちに、私はクライミングをさせている。勇気を挫くぐらいなら、腕を折る方がmalıdır」<sup>52</sup>。

著者は自伝の執筆段階において、名誉と誇りを守るためには一定の暴力行為や危険な行為を容認するという考えを支持していた。その著者にとってシオニストへの転向の第一歩はシオニズムという政治運動に接近したことそれ自体ではない。自伝を執筆するアウエルバッハにとって、第一歩は父によって罰せられることになった、果敢な行為に挑戦する幼少時代の自己にあった。その事件は父が体現したユダヤ教の価値観との対決であり、シオニストとしての人格形成の先取りであったからである。ベルリン移住後にドイツの教養エリートの価値観である名誉と誇りを身に付けた著者は幼少期の行為を英雄的行為と称賛する。その称賛はユダヤ教の伝統との断絶であった<sup>53</sup>。その断絶は、正統派ラビの息子として育てられたアウエルバッハにとって、ブルジョワ層の同化派家庭出身のシオニスト以上

の深い断絶であったと考えられる。ドイツのシオニスト、オッペンハイマーの発言が引用されていることが示唆しているように、彼がここで記述した行為を肯定的に評価する価値観を容認したのがシオニズムであった。

ドイツとシオニズム、ドイツへの愛国心とユダヤ民族への誇りの間の矛盾は、シオニストの間で盛んに議論されたテーマであった。1902年から1903年にかけて、世界シオニスト機構の機関紙『世界』とドイツ・シオニスト連合の機関紙『ユダヤ展望』の間で交わされた論争はその一つである。そこで一方の論陣を張ったのがアウエルバッハであった<sup>54</sup>。そしてこの例が示すことは、次にみるように、彼の内面においてもその他のドイツのシオニストと同様に、ドイツとシオニズムの間の葛藤、「ジレンマ」が存在していたことである。

ドイツ・シオニスト連合の発足から5年が経過していた。ポーゼンのシオニスト、カール・イエレミアスが1902年11月14日『世界』の記事「ドイツのユダヤ人とシオニズム」でドイツのシオニズムの成長が遅れているという見解を示す。彼はその理由を次のように述べる。「ドイツのユダヤ人にはシオニズムへの転向の前段階として、慣れ親しんだ〔ドイツの：引用者注〕文化への愛着をめぐる苦しい格闘がある。そこからの離別はいつもゆっくりとした速度で、常に苦痛を伴うものである」<sup>55</sup>。この主張に反論したのがアウエルバッハであった。1903年2月13日『ユダヤ展望』に「シオニズムの中のドイツ文化」という題のアウエルバッハの記事が掲載される<sup>56</sup>。ここで表明されていることは、シオニストである自身のドイツへの愛国心を疑われることへの怒りであり、自身が持つドイツ文化への愛着であった。彼の主張は、シオニストへの転向はドイツへの愛国心を捨てることと無関係であるということにあった。ドイツのシオニストは「ほかのユダヤ人と同様に同化している」<sup>57</sup>。シオニストとその他のユダヤ人を区別するのは、彼によればユダヤ人への意志にあった。その意志とはユダヤ人の本質を認めることを意味し、その本質とは著者によれば民族や人種であった。前章でみたように、彼は後に人種科学者となるが、すでにこの時点で彼のシオニスト的確信は、ユダヤ人は生物学的集団であるという信念によって支えられていた。そして生物学的人種的なユダヤ人観が、彼の場合、ドイツ国家への忠誠を破棄することなく、つまりドイツとシオニズムの間の「ジレンマ」を内包しながら、それを克服することに寄与した可能性が高いといえる。

アウエルバッハの早期の移住は、ドイツへの忠誠とシオニズムへの献身という「ジレンマ」を彼が意識しなかったためにもたらされたのではなかったと考えられる。確かに大学の反ユダヤ主義はドイツへの失望を生み、パレスチナへの移住の決心の動機となった。しかしその反ユダヤ主義がドイツへの忠誠を完全に奪うことはなかった。第一次世界大戦時のドイツ軍へのパレスチナからの志願が示す

ように、「ドイツ・シオニストの愛国心の最も驚くべき表明はエリアス・アウエルバッハ」にあったとラインハルトが認めている<sup>58</sup>。パレスチナへの早期の移住とドイツへの愛国心の表明という異例の積極的行動を可能としたのは「ジレンマ」それ自体であって、その解消ではなかった。

最後に自伝を執筆する晩年のアウエルバッハの試みについて言及したい。自伝が記述する名誉と誇りに基づく自己は、父が体現したユダヤ教、伝統からの離反であった。英雄的行為の観点で父の価値観を否定したにも関わらず、自伝は伝統と自己を繋ぐ記述を残している。興味深いのは大戦中の西部戦線での記述である。それは戦闘休止の間、時間を見つけて取り組まれた預言者エレミアに関する書物の執筆に関する記述である。彼は執筆の材料の乏しい中、連日長時間を費やし、79枚の文章を書き上げた。そこで挿入されるのが幼少期の記憶に残る、故郷で出会った父の老いた友人で、トラーの筆写を仕事とするソフェールのミグダルの姿である。自伝は別の個所でミグダルを背骨が曲がり、上半身が歪んだ白髪の老人と描写していた<sup>59</sup>。執筆に取り組むアウエルバッハは軍務に服する兵士のはずであるが、著者は自身の姿をこの人物と重ね合わせている<sup>60</sup>。また大学進学及び医師というキャリアはラビを望む父の期待に背く決断であった。著者にとって聖書に関わる書物を書くことは自身の出自と無関係ではなかった<sup>61</sup>。自伝の記述が示唆することは、1960年代後半に自伝を執筆する著者にとって重要であった一つの問題である。その問題は、ブルジョワ層の同化派家庭出身のシオニストとは異なって、正統派の敬虔な家庭出身にしてラディカルなシオニストとなったアウエルバッハが抱えていた伝統との関係であった。その問題は、記述の対象であるベルリン時代の若きアウエルバッハが問題としたドイツかシオニズムかという二つの問題に、正統派としての自己を組み込むことであったと考えられる。

#### 4. おわりに

同化と解放後のドイツ・シオニズムが直面したのはドイツかシオニズムか、ドイツ国家かユダヤ人国家かという「ジレンマ」であった。その「ジレンマ」はブルジョワ層の同化派家庭出身者が多数を占めたドイツのシオニストを悩まし、彼らの積極的行動を抑制したと考えられてきた。本稿は第一次世界大戦前のベルリンで活躍した一人のシオニスト、エリアス・アウエルバッハを取り上げ、「ジレンマ」に関する従来の解釈の前提を再検討することを試みた。この人物は正統派の出自でありながら、シオニストへの転向は宗教的に動機づけられていたわけではない。むしろその転向はドイツの教養エリートの文化の受容と深く関連していた。また反ユダヤ主義は、彼の個人的なシオニスト的確信に基づくパレスチナ移住を

促進した。しかしそれさえドイツへの忠誠と愛国心を彼から奪ったわけではなかった。つまりこの人物はドイツへの愛国心とシオニズムへの献身という「ジレンマ」を意識していなかったわけではない。重要であることは、それにも関わらず、「ジレンマ」はこの人物において、行動を制約したわけではなかったことである。この人物の異例の積極的行動はむしろ「ジレンマ」があって初めて可能になった。

本稿が取り上げたアウエルバッハはドイツのシオニズムの典型的人物ではない。特定の党派を代表した人物ではなく、宗教的に敬虔な正統派家庭出身であった。世代でいえば第二世代に属しながら、シオニスト活動への関与の早さゆえに第一世代に属するという自己認識を持っていた。異例の早さでパレスチナへの移住を試みた人物でさえある。こうした人物の例は、ドイツのシオニズムがブルジョワ層の同化派家庭出身者によってのみ支持されたわけではなかったことを示すことで、その担い手の多様性を提示し、それを通じて「ジレンマ」や世代論といったドイツ・シオニズムに関する従来の説明枠組みを修正することを促すことになる。

なおパレスチナ移住後アウエルバッハは、ハイファの工科大学の言語闘争に参加し、またフェリクス・ローゼンブリュート（ピンハス・ローゼン）と政党アリヤ・ハダシャを率いて地方政治、後には国政に進出する<sup>62</sup>。1930年代にはドイツに一時帰国し、ユダヤ教学高等学院の講師を務め、イズマル・エルボーゲンの歴史叙述プロジェクトで『荒野と約束の地』を著し、歴史家として有名になる<sup>63</sup>。しかしこうしたことは彼のベルリン時代のシオニスト活動を越えた出来事であり、これを含んだ伝記的再構成は他日を期したい。

推薦者：勝又 悦子  
同志社大学神学部神学研究科教授

## 註

<sup>1</sup> Jehuda Reinharz, *Fatherland or promised land: the dilemma of the German Jew, 1893-1914* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1975).

<sup>2</sup> この見解は近年の研究にまで受け継がれている。Hagit Lavsky, *Before catastrophe: the distinctive path of German Zionism* (Detroit: Wayne State University Press, 1996); Stefan Vogt, *Subalterne Positionierungen: der deutsche Zionismus im Feld des Nationalismus in Deutschland 1890-1933* (Göttingen: Wallstein Verlag, 2016).

<sup>3</sup> Miriam Rürup, *Ehrensache: jüdische Studentenverbindungen an deutschen Universitäten 1886-1937* (Göttingen: Wallstein, 2008); Daniel Wildmann, *Der veränderbare Körper: jüdische Turner, Männlichkeit und das Wiedergewinnen von Geschichte in Deutschland um 1900* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2009); ベルリンについては、Barbara Schäfer, *Berliner*



- 
- Zionistenkreise: Eine vereinsgeschichtliche Studie* (Berlin: Metropol, 2003).
- 4 Elias Auerbach, *Pionier der Verwirklichung: ein Arzt aus Deutschland erzählt vom Beginn der zionistischen Bewegung und seiner Niederlassung in Palästina kurz nach der Jahrhundertwende* (Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt, 1969); Bestand B. 2/21, 5, Elias Auerbach, Zentralarchiv zur Erforschung der Geschichte der Juden in Deutschland (ZA), Heidelberg, Germany. 新聞や雑誌については以下で適宜参照する。
  - 5 アウエルバッハの幼少期の記述については、Elias Auerbach, *Pionier*, 8-50.
  - 6 Aufzeichnungen des Vaters über seinen Sohn Elias, 1882-1908, Bestand B. 2/21, 5, Elias Auerbach, ZA, Heidelberg, Germany.
  - 7 Elias Auerbach, *Pionier*, 129.
  - 8 Elias Auerbach, *Pionier*, 70-72.
  - 9 Elias Auerbach, *Pionier*, 73; レーヴェの個人史については、Jehuda Louis Weinberg, *Aus der Frühzeit des Zionismus. Heinrich Loewe* (Jerusalem: Mass, 1946); Frank Schlöffel, *Heinrich Loewe. Zionistische Netzwerke und Räume* (Berlin: Metropol, 2018).
  - 10 Elias Auerbach, *Pionier*, 73. この集会は 1895 年にベルリンに新設されたユダヤ読書室 Jüdische Lesehalle で開催されたものと思われる。
  - 11 Elias Auerbach, *Pionier*, 74.
  - 12 Elias Auerbach, *Die Innervation der Hirngefäße* (Berlin: S. Scholem, 1905).
  - 13 Inka Bertz, “Politischer Zionismus und Jüdische Renaissance in Berlin vor 1914,” in *Jüdische Geschichte in Berlin: Bilder und Dokumente* (Reinhard Rürup Hg., Berlin: Ed. Hentrich, 1995), 167. ベルリンの文化シオニズムについては、Mark H. Gelber, *Melancholy pride: nation, race, and gender in the German literature of cultural Zionism* (Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2000), 17-54.
  - 14 Elias Auerbach, *Pionier*, 137.
  - 15 Elias Auerbach, *Pionier*, 76.
  - 16 Max Jungmann, *Erinnerungen eines Zionisten* (Jerusalem: R. Mass, 1959), 40.
  - 17 Yehuda Eloni, *Zionismus in Deutschland: von den Anfängen bis 1914* (Gerlingen: Bleicher, 1987), 125, 131-133; Elias Auerbach, *Pionier*, 138.
  - 18 Elias Auerbach, *Pionier*, 127.
  - 19 Elias Auerbach, *Pionier*, 144-151; ウォルター・ラカー『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』高坂誠訳、第三書館、1987年、192-194頁。
  - 20 トイブラーは兄イスラエルとユダヤ教学高等学院の学友であった。Elias Auerbach, *Pionier*, 136.
  - 21 会員の回想録を参照。Eli Rothschild Hg., *Meilensteine: vom Wege des Kartells Jüdischer Verbindungen (KJV) in der Zionistischen Bewegung* (Tel Aviv: K.J.V, 1972).
  - 22 アウエルバッハの娘婿エマヌエル・ジーモンは 1930 年代にマッカビ世界競技会の運営指導部に就任している。Emanuel Simon, *Erinnerungen an die Gründung des Makkabi Welt – Verbandes* (Ramat Gan: not listed).
  - 23 Von Sanctus (Elias Auerbach), “Ideale Werte,” *Der Jüdische Student*, August 1902, 66; Elias Auerbach, *Pionier*, 137.
  - 24 Elias Auerbach, *Pionier*, 151-153; Jehuda Reinharz, *Fatherland*, 66.
  - 25 ベルリン大学の学術読書室の反ユダヤ主義については、Jehuda Reinharz Hg., *Dokumente*

- zur *Geschichte des deutschen Zionismus 1882-1933* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1981), 66-67.
- <sup>26</sup> Hermann Greive, *Geschichte des modernen Antisemitismus in Deutschland* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1983), 61-62; ジョージ・L・モッセ『フェルキッシュ革命—ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ—』植村和秀ほか訳、柏書房、1998年、247-251頁。
- <sup>27</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 151-154.
- <sup>28</sup> この学校については以下を参照。Meir Hildesheimer, “Religious Education in Response to Changing Times: Congregation Adass-Isroel Religious School in Berlin,” *Zeitschrift für Religions- und Geistesgeschichte* 60 (2008), 111-130.
- <sup>29</sup> *Aufzeichnungen des Vaters*, Bestand B. 2/21, 5, ZA.
- <sup>30</sup> 自然科学の文献への正統派からの批判については、Mordechai Breuer, *Jüdische Orthodoxie im Deutschen Reich 1871-1918* (Frankfurt am Main: Jüdischer Verlag bei Athenäum 1986), 187-197.
- <sup>31</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 92. アウエルバッハによるモーセに関する著作はヴェルハウゼンの文書仮説に依拠している。Elias Auerbach, *Moses* (Amsterdam: G. J. A. Ruys, 1953).
- <sup>32</sup> アウエルバッハの人種問題については以下の著作を参照。John M. Efron, *Defenders of the race: Jewish doctors and race science in fin-de-siècle Europe* (New Haven and London: Yale University Press, 1994), 127-141; Veronika Lipphardt, *Biologie der Juden: jüdische Wissenschaftler über "Rasse" und Vererbung 1900-1935* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2009), 213-222.
- <sup>33</sup> この問題については、別稿で論じる予定である。また以下の文献に詳しい。Mitchell B. Hart, *Social Sciences and the Politics of Modern Jewish Identity* (Stanford Studies in Jewish History and Culture; Stanford: Stanford University Press, 2000).
- <sup>34</sup> Von Sanctus (Elias Auerbach), “Ideale Werte,” *Der Jüdische Student*, August 1902, 68.
- <sup>35</sup> Elias Auerbach, *Palästina als Judenland* (Berlin: Jüdischer Verlag, 1912). なおこの著作はパレスチナにおけるアラブ人の存在に注目したシオニストの最初期の例の一つである。ラカー『シオニズムの歴史』、313頁。
- <sup>36</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 261. ハイファでのアウエルバッハの医療活動については、Andrea Livnat, “Jeckische Lebenswege par excellence? Deutsch-jüdische Ärztinnen und Ärzte auf der Suche nach neuen Chancen,” in *Deutsche und zentraleuropäische Juden in Palästina und Israel* (Anja Siegemund Hg., Berlin: Neofelis, 2016), 184-188.
- <sup>37</sup> 当初、ベルリンでは反ヘルツル派の勢力が一定の影響力を持っていた。Yehuda Eloni, *Zionismus in Deutschland*, 167-172.
- <sup>38</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 151.
- <sup>39</sup> ここでの恥のとらえ方については以下を参照。作田啓一『恥の文化再考』筑摩書房、1967年、9-11頁。
- <sup>40</sup> ユダヤ人に関する偏見やステレオタイプについては、サンダー・L・ギルマン『ユダヤ人の身体』管啓次郎訳、青土社、1997年。
- <sup>41</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 53.
- <sup>42</sup> Ernst Akiva Simon, “Wie ich Zionist wurde,” in *Meilensteine* (Eli Rothschild Hg., Tel Aviv: K.J.V., 1972), 43-44.

- 
- <sup>43</sup> Anita Shapira, *Land and power: the Zionist resort to force, 1881-1948*, trans. William Templer (New York: Oxford University Press, 1992), 4-5.
- <sup>44</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 86.
- <sup>45</sup> Miriam Rürup, *Ehrensache*, 2008; “Was wir wollen,” *Jüdische Turnzeitung. Officielles Organ des Jüdischen Turnverein „Bar Kochba“*, Mai 1900, 1.
- <sup>46</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 176-177.
- <sup>47</sup> Jehuda Reinharz, “Ideology and Structure in German Zionism, 1882-1933,” *Jewish Social Studies* 42 (1980), 127-128. 19世紀後半の教養エリート男性の名誉観については、Ute Frevert, *Ehrenmänner: das Duell in der bürgerlichen Gesellschaft* (München: C.H. Beck, 1991), 178-232.
- <sup>48</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 86-87.
- <sup>49</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 383.
- <sup>50</sup> Todd Samuel Presner, *Muscular Judaism: The Jewish Body and the Politics of Regeneration* (New York: Routledge, 2007), 183. ただし、パレスチナ移住後にはアラブ人との共存を重視する見解を示している。Interview von Edmond Breuer mit Elias Auerbach, Bestand B. 2/21, 55, Elias Auerbach, ZA, Heidelberg, Germany.
- <sup>51</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 47.
- <sup>52</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 48-49.
- <sup>53</sup> Daniel Boyarin, *Unheroic conduct: the rise of heterosexuality and the invention of the Jewish man* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1997).
- <sup>54</sup> この論争については以下の研究が詳しい。Yehuda Eloni, *Zionismus in Deutschland*, 163-165.
- <sup>55</sup> Karl Jeremias, “Das deutsche Judentum und der Zionismus,” *Die Welt*, Nr. 46, 14. 11, 1902, 4.
- <sup>56</sup> Elias Auerbach, “Deutsche Kultur im Zionismus,” *Jüdische Rundschau*, Nr. 7, 13 Februar, 1903, 49-51. ラインハルツはこの記事をドイツ文化にルーツを持つユダヤ教から離れたシオニストの意見表明の典型例とみなすが、アウエルバッハの出自を考慮すればこの想定には疑問がある。Jehuda Reinharz, *Fatherland*, 125-126.
- <sup>57</sup> Elias Auerbach, “Deutsche Kultur im Zionismus,” 50.
- <sup>58</sup> Jehuda Reinharz, *Fatherland*, 223.
- <sup>59</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 30.
- <sup>60</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 386-387.
- <sup>61</sup> Elias Auerbach, *Pionier*, 114.
- <sup>62</sup> Jehuda Reinharz Hg., *Dokumente*, 127-128; Interview von Edmond Breuer mit Elias Auerbach, Bestand B. 2/21, 55, ZA.
- <sup>63</sup> Elias Auerbach, *Wüste und Gelobtes Land*, 2 Bände (Berlin: Schocken, 1932-1936).